

やさしい日本語シラバスを用いたビジネスパーソン向け 日本語教育に関するケーススタディー

A Case Study of Japanese Education for Foreign Office Workers using the “Yasashii-Nihongo” Syllabus

高木 祐輔

要旨

現在、約 15 万の外国籍ビジネスパーソンが日本に滞在している。職業的専門性の高さから社内では日本語力を求められず、英語または母語を用いて仕事を行っているケースがある。しかし、彼・彼女らが日常生活や同僚とのコミュニケーションを円滑にしようと日本語学習を希望した際、日常業務のため学習時間が限られ、2~3 年程の滞日期間しかないにもかかわらず、日本語学校で行われるシラバス（初級 200~300 時間）を基に教育にあたるケースがある。このシラバスでは、初級終了まで 2 年以上（週 2 時間×4 週=8 時間/月、月 8 時間×25 か月=200 時間）要し、初級文法で話せるようになった頃には帰国するという可能性がある。本研究では、庵（2009）¹がコミュニケーションに最低限必要な文型・表現を抽出した文法項目 Step1, Step2 用い、会話特化型の授業を半年（週 2 時間×24 週、計 48 時間）行うことでどの程度会話力が身につくか、OPI²を用いて測定した。結果は OPI 初級中判定で、学習者はテストの質問を理解し、受け答えはできるものの、語彙に関する知識不足が目立つことがわかった。

キーワード：ビジネスパーソン、やさしい日本語、短期学習、初級日本語教育、文法シラバス

1. 研究の背景と趣旨

厚生労働省の「外国人雇用状況」の届出状況の調査結果によると、2016 年 10 月末現在、日本で働く外国人の数は 108 万人（2012 年は 68 万人）を超える。本研究で対象とする外国籍ビジネスパーソン（企業のオフィスで働くこと想定される人文知識・国際業務ビザ、企業内転勤ビザ、投資・経営ビザ保有者、以下、ビジネスパーソン）に関しては、14.8 万人（2012 年は約 10 万）に上り、急速にその数を伸ばしている。このビジネスパーソンの学習動機として「商談はできる必要はないが、簡単な日本語を話すだけでもクライアントの心証アップに繋がる」、「同僚とのコミュニケーションを円滑にしたい」などがあり、会社の人事担当者にも日本語習得による人間関係円滑化への期待があるようだ。同時に、業務最

¹ 庵（2014）では、その後の実践で得た知見をもとに改訂版 Step1, Step2 が示されている。本研究の調査は 2011 年から 2012 年に行われ、改訂前の Step1, Step2 を参照している。

² OPI (Oral Proficiency Interview) とは、外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテスト。

優先であり、学習時間の確保が困難なため、「短時間で効率的に日本語を学びたい」というニーズが強くある。現状、多くの教育現場で使用されているシラバスは、初級段階で機能が重複する文型が提出される点、文型提出順が必ずしもコミュニケーションに役立つための順ではないという点でビジネスパーソンのニーズに合致していない。このように学習者の環境から生じるニーズとシラバスのずれについては、尾崎（2004）も「学校型日本語教育」と「地域日本語教育」では、求められる学習項目自体が異なると指摘している。

本研究では、筆者が活動するビジネスパーソン向けの日本語教育の現場で、学習者から多く上がった要望や不満を基に新たなシラバスを検討した際、庵（2009）の文法シラバスが最も近いという結論に至った。庵（2009）では、初級シラバスを1機能1文型に絞り、コミュニケーションに最低限必要な文型・表現を抽出している（以下、「やさ日シラバス」）。本研究では初級日本語レベルのビジネスパーソンに適した教育を目指し、「やさ日シラバス」を活用したコースデザイン・実践を行った。その際、調査対象者の職場の同僚の意見も参考とした。調査は、半年（週2時間×24週＝48時間）、会話特化型の授業を行い、学習者がどの程度の会話力を獲得できるか OPI を用いて測定した。OPI を用いたのは、会話力を測定するために最も適していると考えたためである。また、山内（2009）が OPI 受験者のデータ面から導いた中級判定に必要な項目が「やさ日シラバス」でほぼカバーされていることから、調査後の OPI 判定結果が中級に及ばなかった場合、その要因を文法項目以外に求められると考えた。例えば、授業時間、指導法、自習の指導などである。

2. 従来のシラバスを使用する問題点

ビジネスパーソンには、「短時間で効率的に日本語を学びたい」というニーズが強くある。現状、多くの教育現場で使用されている初級を終えるまで200～300時間という設定で組まれたシラバスは、滞在期間と学習に割ける時間が不透明なビジネスパーソンにはマッチしない。短期間での日本語習得に関しては、文化庁の『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案（文化庁 2010）において、「来日間もない外国人が、その生活基盤を確立する上で必要となる日本語学習の時間について検討し、標準的なカリキュラム案全体に当たる30単位を60時間とし、それを必要最低限の時間数の目安とした」（文化庁 2010:5）とされている。本研究では、ビジネスパーソンのニーズに合わせ、さらに短い48時間に設定した。

3. 先行研究

短期間での日本語学習シラバスは、鹿嶋（2004）の地域在住外国人のための短期集中型コースの検討・実践や、國頭（2013）など様々な研究・実践が行われている。中でも國頭（2013）では、短期留学生の学習ニーズや言語活動の調査にとどまらず、日常生活でよく目にする文字の調査も行い、シラバスを提案している。本稿のシラバスでは、ビジネスパ

一ソン特有の場面をカバーしている点、短期間の学習を終えた後も、学習者が継続的に日本語を学習できることを視野に入れている点で、先行研究と異なる。

次に「ビジネスパーソン」向けの研究に関してだが、現状、主に中級、上級レベルを念頭に行われており、ビジネス日本語研究会 (BJG) が挙げているビジネス日本語に関する参考文献リストでは、「初級」というキーワードは 395 件の著書・論文のうち 5 件と少ない。会話に焦点を絞り、圧縮したシラバスでビジネスパーソン向け初級日本語教育にあたったという報告は管見では見当たらない。

4. 「やさ日シラバス」について

庵 (2009) で示された文法シラバスでは、初級は以下の Step 1, Step 2 から構成され、Step 1 では全てが産出項目となっており、学習者が自ら発話できることが想定されている。Step 2 では産出項目と、聞いて分かれば良い理解項目に分かれているが、Step 2 が終わり、学習者の習得が進むにつれて、全てを産出項目として扱っていくとされている。また、庵 (2014) の改訂版 Step 1, Step 2 では「～てもらいます」などが追加され、これらの項目で自らの思考内容を不足なく表現できるとされている。

(表 1) Step 1 の文法項目

項目	文型 (ゴシックのものが改訂版で追加された)
名詞(N)文	～は N・naA です。/N・naA ですか?/N・naA でした。
形容詞文	～は N・naA じゃありません。/①N・naA じゃないです。
動詞(V)文	～は N・naA じゃありませんでした。/N・naA じゃなかったです。
NaA :	～は iA です。/iA ですか?/iA かったです。
ナ形容詞	～は iA くありません。/iA くないです。/iA くれませんでした。/iA くなかったです。
iA :	～は V ます。/V ますか?/V ました。/V ません。/V ませんでした。
イ形容詞	<応答>王さんは主婦ですか? はい、そうです いいえ、違います <応答>昨日、会社に行きましたか? はい (行きました) いいえ (行きませんでした)
助詞	～を ～の (所有格) ×～の (準体助詞) ～φ (昨日 φ 洗濯をしました) ～に (時間) ～に (行き先) ～に (場所) ②「 <u>住んでいます</u> 」(かたまりとして導入) ～ で (場所) ～で (手段) ×「 <u>歩いて</u> 」(かたまりとして導入) ～から～/まで (時間) × ～が (目的語の「が」) ～と (並列助詞) ～も ～よ ～ね
疑問詞	×誰 何 ③何〇 (何時, 何年, 何歳, 何個) ④どこ ⑤いつ ×どれ・×どっち ×どう
指示詞	(⑥これ/それ/あれ) この/その/あの+N こっち/そっち/あっち ここ/そこ/あそこ
ボイス	⑦バナナを食べたいです。(願望)
モダリティ	⑧たぶん～です/ます
接続詞	⑨A.それから, B. ×A.それで, B. ×A.そのとき, B.
その他	数字 ×曜日 ×～には弟がいます (所有動詞「いる」) …に～があります/います。

（表2）Step 2の文法項目

項目	文型（ゴシックのものが改訂版で追加された）
産出レベル	
形態論	～て（テ形） ⑩～た（タ形） 辞書形 ×～ない（ナイ形）
助詞	⑪から, まで（場所） ～が（主語）しか（～ない）
形式名詞	⑫こと ⑬もの
文型	×～は...ことです。 ×～たり～たりします
ボイス	×～ことができます ×～く/×～に/×～ように なります ～てもらいます
アスペクト	⑭～ています ×（まだ）～ていません ⑮～たことがあります
モダリティ（認識）	×～と思います
モダリティ（対人）	⑯～てください・～ないでください（依頼） ×～ないといけません（当為） ⑰～てもいいですか（許可求め） ×～たいんですが（願望・許可求め）
複文・接続詞	⑱～て（連続, 理由） ×～てから（継起） ⑲～とき（時間）△①～たら（条件） ⑳～けど（逆説）/～。 ×しかし, ×～ので（理由）/×～。なので, ×～ために/×～ように/×～ための（目的）
その他	×～んです △②どうして...んですか? ×～からです。
理解レベル	
モダリティ（対人）	～てもいいです（許可） ～てはいけません（禁止） ～ましょう（勧誘） ～たほうがいいです（当為） ～なさい（命令）
その他	昨日買った本（はこれです。）名詞修飾 △③田中さんが来るか（どうか）（教えてください）（名詞化）

*①～⑳は学習者が OPI で使用した項目の一部。△①～△③は学習者の発話に現れなかったが、理解できた項目。

「×」は産出レベルの項目の中で発話に現れなかったもの。詳細は5節で述べる。なお、実際の授業では、学習者のニーズに対応して、リスト以外の項目を+αとして教えることもある。

5. 調査について

5-1. 調査の方法

「やさ日シラバス」を48時間分の授業で終えるカリキュラムを作成し、初心者レベルのビジネスパーソン3名に授業を行う。その後、OPI テスターに依頼し、会話力を客観的に測定する。なお、本調査では会話力向上を優先するため、平仮名など文字を書く指導は行わず、学習者の自習に委ねる。

- ・調査対象：日本語初心者レベルのビジネスパーソン
- ・対象者：当初3名、韓国籍の男性 IT 企業会社員 Y (20代), S(20代), K (30代)
- ・学習歴：Y, S ゼロビギナー, K 約30時間 みんなの日本語 I 中盤まで学習済
- ・調査期間：1年（ただし、実際に授業を行った期間は6か月）

第一期：2011.2～2011.7 1時間×週2回×12週=24時間（地震のため休止期間あり）

第二期：2011.10～2012.3 1時間×週2回×12週=24時間（休暇での休止期間あり）

- ・調査方法：授業を実施した後、以下の方法で効果を測定
会話能力：OPIによるレベル判定
聴解能力：旧日本語能力試験4級聴解問題全て、3級聴解問題の一部
- ・指導法：初期は主に場面シラバス、中期以降は文型を取り上げ、指導にあたった。
- ・媒介語：単語説明や会話文の訳をハングル文字で一部示した。
- ・参加状況：Y 48時間終了、S 授業開始2週間後、東日本大震災のため帰国
K 24時間で終了（授業時間の調整がつかず、他教師の下で学習継続）

5-2. 調査の結果

授業を48時間分全て受講した学習者Yに対して、以下の調査を行った。

- ①会話能力：OPI 初級中レベル（初級下～超級までの10レベル中、下位から2番目）
- ②聴解能力：2007年度旧日本語能力試験4級聴解の全問題、3級聴解問題を一部使用
結果：正解数 4級 絵のある問題 7/9 絵のない問題 8/9
正解数 3級 絵のある問題 2/8 絵のない問題 2/4
- ③追加項目：定着率を測定するため穴埋め式文法テスト実施（Kの点数は参考情報）
結果：24時間終了時のテスト（告知有り）学習者Y 80/100 学習者K 94/100
48時間終了後のテスト（告知なし）学習者Y 20/34 学習者K 33/34

6. 分析・考察

OPIテストの音声文字化し、発話例を挙げながら、調査結果を理解面、産出面、語彙不足を補うストラテジー、の3点から分析、考察する。

6-1. 理解面からの分析

当該学習者はテストのナチュラルスピードに近い発話に対応できており、テストからの書面による評価でも「質問の意味を理解できる」とあった。以下、例（T：テスト Y：学習者Y）。なお、会話中の「も、」は韓国語の「何」にあたる言葉で、フィラーとして使用されていたことを示す。また、「△」は、1-3. 「やさ日シラバス」内の項目で、学習者が産出はしていないが、理解していると思われる項目。

(1) T：あ、そうですか。韓国ですか。韓国も広いですけど、韓国のどちらですか。

Y：韓国のソウルで住んでいます。

(2) T：△②どうして日本に来たんですか。

Y：あー、前の会社が、はい、十年くらい仕事をして、「あー、違う仕事がありますかなー」思いして、はい、私の友達が、も、ヘッドハンターを連絡して、は

い、まあ、日本の会社で、も、席があります。連絡しました。それから、私が、も、日本で来ますね。

(3) T: 休みの日はどんなことをしているんですか。

Y: 休みの日は、まあ、私が、まあ、自転車と写真を大好きですから。他はもう、代々木公園と東京タワーと、まあ、チャジャンゴ、あ、自転車に乗って、自転車に乗って、行って、写真を撮って…。

(4) (学習者が電車内に忘れ物をしたというロールプレイで)

T: あ、じゃあ今の電車の、電車の△③どのへんに乗っていたかわかりますか。

Y: ろっばんぐらい。

T: 6番ぐらい。そうですか。

(5) T: ああ、そうですか。じゃあ、それは自分で見るだけで、他の人には見せないんですか。他の友達に撮った写真を見せないんですか。

Y: あー、まあ、私は撮って、友達が、友達と一緒に撮った写真はプレゼントします。

(6) (趣味で撮った写真をなぜコンテストに出さないのかと問われて)

T: どうしてですか。

Y: 私は、スキルがちょっと。まあ、スタイルがちょっと違いですね。

T: スタイル? あ、それは例えばどういうことですか。

Y: はい、私は、まあ、私が好きな写真が一、違う人? 違う人の思いがちょっと違うです。だから、コンテストは、ちょっと好きじゃないです。

(7) T: ああ、そうですか。日本は、今、おひとりですか。

Y: あ、今も一人で。

T: ああ、そうですか。じゃあ、家のことも全部自分で。

Y: ああ、はいはい。家でも、一人で住んでいます。

(8) T: そうですか。Yさんはもうずっと昔からコンピュータが好きなんですか。

Y: あ、昔は、前の会社は、うーん、ちょっと違うですね。

(9) T: ああ、そうですか。今、一番行きたいところはどこですか。

Y: あー、今は、大阪と名古屋のほう、京都、京都。(中略)

T: △①だったら、どこが一番行きたいですか。

Y: まあ、一番は、まあ京都です。

・例(1), (2), (3), (4)は授業開始初期から学習者に対し、「疑問詞+んですか」を用いた質問を繰り返し行ってきたことが理解の助けになったと思われる。一方、例(5)のように疑問詞を使わない質問や、例(6)のように抽象的な質問にも対応できた理由は、学習者に日本語母語話者の友人はおらず、社外ではほとんど日本語を使っていないことから、社内業務時に日本語しか話さない母語話者に接する過程で対応力が身に付いたのではないかと推測される。一方で、例(7), (8)のように質問の意図を正確に理解していないケースや、例(9)のように「一番」を聞き逃し、質問文の意図を何となく推測し答えるケースもあった。

直後の質問で「一番」の意味を理解していることから、質問文を正しく理解できなかったのは語彙の知識不足によるものではないと思われる。聴解テストの4級レベルはほぼ正解できたが、3級は音声の大半を理解できなかったため、途中で打ち切りとした。理解面全般に関して、語彙不足は否めないものの、筆者の予想以上に会話に対応できるようになっていた。

6-2. 産出面からの分析

「やさ日シラバス」で教えた項目のうち、学習者が正しい文脈で使用したものを以下に挙げる。(①～⑳ は、上述の(表1)(表2)内の番号と対応)

- ①だから、コンテストはちょっと好きじゃないです。②韓国のソウルで住んでいます。
③千葉はここから、何分ぐらい…ですか。④先生は、まあ、どこに住んでいますか。
⑤仕事はいつでもありますよ。⑥会議室のこんな、このパソコンとテレビとこれ全部。
⑦私は、まあ、最近の一、ほうより、古いのほうは写真も好き、あー撮りたいです？
⑧ちょっと、はい…、うーん、コンテストに送っても多分よくないですね。
⑨まあ、日本の会社で席があります。連絡しました。それから、私が日本で来ますね。
⑩あー、まあ、私は撮って、友達が、友達で一緒撮った写真はプレゼントします。
⑪ディズニーランドから家までは、うーん、小さい、小さいか。ちか、ちかいですか。
⑫ああ、写真はまあ。うーん、私が、まあ、見ていることを、まあ、記憶ですか？
⑬ちょっと、古い、古いものを撮り、撮った、撮ること、撮ることを好きですから。
⑭今まで、15年くらい仕事をしていますね。あー、14年くらい。
⑮ディズニーランドへ行ったことがありますか。
⑯はい、も、私の携帯で連絡してください。⑰先生、も、話しても大丈夫ですか。
⑱あー、ディズニーランドへ行って、何を、乗ったことがありますか。
⑲自転車は、まあ、私が、自身で、韓国の時は韓国に住んでいるときは、クラブと。
⑳T: 毎日たいへんですね。 Y: 毎日はありませんけど。

・上述の各項目の正用は、テスターが質問した直後に学習者がそれを真似て使用したのではなく、会話の流れの中で自然に使用したものを取り上げている。その意味で学習者は上述項目を習得したと言えるだろう。一方、表1、表2で「×」をつけた項目は学習者の発話に現れなかったものだが、OPI中に使用する場面がなかったからではないと思われる。なぜなら、穴埋め式文法テストで「～んです」「～たら」「～ために」「～たり、～たり」などは不正解となっているからだ。よって、これらの項目は定着が不十分なため学習者が使用できなかったと言えそうである。なお、「～ために」に関しては、授業中「旅行に行くために頑張ります」と言わせたいところで、学習者が「旅行したいから、頑張ります」と発話している。このように、より簡単な項目で言い換えられることが定着を妨げたのではないかと思われる。

6-3. 語彙不足を補うストラテジー

・学習者 Y は、語彙不足を補うために、語彙の一部を口にすることで、テスターから正しい日本語を引き出そうとするストラテジーを使用していることがわかった。

(10) (学習者が電車内に忘れ物をしたというロールプレイで)

T: そうですね。すぐ行った電車、えー電車、山手線、内回り外回りありますけど。

Y: 山手線、新宿、新宿のほうど、あ、行っている電車です。

T: 新宿から来たんですか。

Y: あーいやいやいや。新宿に、行った…行っただけですか？あ、行った、行っている電車です。

・例(10)のように文法的に正しい言い方を相手から引き出そうとしているケースも見られた。これらは授業中に発表者が学習者に正確な知識を求めず、学習者が単語の一部を口に、似たような発音をすれば、助け船を出していたことが原因の一つだと思われる。その過程で学習者が母語話者と会話する際にこのストラテジーが有効だと考えた可能性がある。

7. まとめ

「やさ日シラバス」を基に、半年間、会話特化型の授業を受けた学習者の会話力は OPI で初級中となった。OPI 中級判定に至らなかった要因は、6 節からも見て取れるように、当該学習者には語彙に関する知識と文を構成する力が不足していた。この点に関しては、テスターからも「語彙不足、単語レベルでの発話になりがち」という指摘があった。また、聴解力測定においては語彙に関する知識不足により正解に至らないケースが見られた。一方で、当該学習者は 30 分近く日本語のみでテスターと会話を継続し、ナチュラルスピードの日本語による質問に対応し、自分に関する基本的な事項の趣味、出身、仕事などについて説明・質問ができるようになっていた。

今後の課題として、通常シラバスで 48 時間程度学んだ学習者の OPI 結果との比較や、韓国語母語話者以外での授業を行い、「やさ日シラバス」の効果を検証することが挙げられる。なぜなら、現状では調査対象者が少なく、その対象者が韓国語母語話者に限られているため、48 時間の授業後の会話力とシラバスの関係を客観的に述べることはできないためである。またシラバスやその運用についても改善が必要だろう。文法項目の整理をはじめ、学習者がよく遭遇する場面に関する語彙を優先的に指導しつつ、基本的な語彙を体系的に提示し、アプリなどを活用することで、定着を促す仕組みづくりを行うことが挙げられる。また、教室外で身に付けたことをうまく授業に取り組みことを検討していきたい。今回の調査で、学習者 Y は社内での日本人社員とのやり取りの中で、「まあ」、「うん」、「いやいや」など、授業で扱っていない表現を身に付けていた。教室外で耳にする日本語を授業内

容と融合させることも短期間で会話力を高める一助となりそうだ。ただ、教室外の学習効果を測定することは難しく、本研究では考慮していないが、どのような日本語使用場面・機会があると短期間での日本語習得の助けになるのかを探ることも今後の課題としたい。

参考文献

- 庵 功雄 (2009) 「地域日本語教育と日本語教育文法」『人文・自然研究』3, pp.126-141, 一橋大学
- 庵 功雄 (2009) 「「やさしい日本語」研究の現状と今後の課題」『一橋日本語教育研究』2, pp.1-12, ココ出版
- 尾崎明人 (2004) 「地域型日本語教育の方法論的試論」『言語と教育』くろしお出版
- 鹿嶋恵・森陽子 (2005) 「地域在住外国人のための日本語コース・デザイン再考:サバイバル・ジャパニーズとしての短期集中型コースの可能性と課題」『三重大学留学生センター紀要』6, pp53-70, 三重大学留学生センター
- 國頭あさひ (2013) 「短期留学生のためのサバイバル日本語教育」『創価大学大学院紀要』35, pp.243-263, 創価大学大学院
- 文化庁 (2010) 『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について』文化審議会国語分科会
- 山内博之 (2009) 『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房
- 厚生労働省 「外国人雇用状況」の届出状況の調査
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000148933.html>
- ビジネス日本語研究会 (BJG) 「参考文献」
<http://www3.grips.ac.jp/~BusinessJapanese/references.htm>

(たかぎ ゆうすけ 言語社会研究科博士後期課程)